

佳作

命をつなぐ人たち

神奈川県 湘南白百合学園小学校五年 石井 恵美理

私はこの夏、とても大きな経験をしました。それは、お父さんが骨髄バンクのドナーになったことです。

最初に骨髄バンクという言葉聞いたのは、私のバレエ教室が参加した「命の集い」というイベントでした。ステージで踊ったときに、病気で困っている人のために開かれている会なのだ聞きましたが、その時はよく分かりませんでした。ですが、その会がきっかけでお父さんはドナー登録をして、実際に選ばれることになりました。

ある時、「ドナーになった。」とお父さんから聞いた時も、私はあまりピンときませんでした。血液が合う人がいて、その人を助けることができるらしいけど、どんなことをして、どんなふうに助かるかは、想像できなかったです。お父さんが入院して末梢血幹細胞をとることになったと聞きましたが、まだ実

感がありませんでした。

実際に病院に入院しているお父さんを見に行った時、私はちょっとドキドキしました。病室で退屈そうにしているお父さんがいつものように冗談を言っているのを見て、ふつうに感じることもありましたが、でも、ふだんは来ることのない病室にいてしかも一週間近くお父さんがいないと思うと、いつもとは違う特別なことをしているんだなと思いました。

その時に、お母さん（医師でもある）が説明してくれました。

「お父さんの血の細胞が、今病気と戦っている人の命を助けるんだよ。」

私はびっくりしました。自分も知らない人のために体をはっているなんて、想像していませんでした。父が退院した後、神奈川県立こども医療センターのイベントにも行きました。そこでは小児がんの話や、病気の子を支えるお母さんのお話を聞きました。その時、「命の集い」で踊った私も、お父さんも、病院の先生や看護師さんも、つながって、患者さんの命を支えているんだと感じました。

私はこの夏、人を助ける事は、みんながつながってやるものだとなりました。病院の人たちや、そのドナー、イベントを開く人、参加する子どもたちま

で、多くの人たちが関わっているのだと思います。ドナーの事や、骨髄バンクの事など何も知らない私がお今は、大切さを感じています。お父さんがドナーになった事で、病気で苦しんでいる人が病気から解放され、健康な人と同じ生活が出来るようになってほしいです。